

巻頭言

1985年の日本、アーサー・C・クラークの小説“2010: Odyssey Two”を原作とする映画が、『2010年』の邦題で上映され、当時大学生だった私はそれを観た。四半世紀が経ち、本物の2010年が来て去った。惑星探査の話題の多い年であった。5月に「あかつき」が種子島から飛び立ち、6月に「はやぶさ」の旅がまばゆい輝跡を下界に焼きつけて終わり、師走に「あかつき」は金星に達するも周回軌道に入れず嘆息が巷を満たした。厳冬の早暁、明星の光はひとときわ硬い。

日本は混迷の時代にある。国家として、急激な高齢化の中での人口減少期に入り、将来ビジョンがうまく描けない。抜本的施策は、「景気回復後＝逃げ水的幻想未来」へ先送りが繰り返えされ、世論は国の構造的病質による諸症状を政府の無能力のせいにして、無意味な選択変更を重ねる。大学では日々の忙しさが賢慮を掩蔽している。熟考を要する本質的な物事は後回しにされ、教員は事務的・形式的なことの処理に忙殺されている。学問世界の自由な活力は失われ、わくわくする議論は枯渇し、学生は就活をして去ってゆく。先見の智の灯火を高く掲げ、時代に警鐘を鳴らすのは誰の仕事だったのだろう。希望を与えると喧伝される探査プロジェクトにおいても、形式的な審査への対応に忙しく、サイエンスと技術の本質の検討が形骸化している。夢を探求し実現する気魄に乏しい。

惑星科学は、探査にしろ、望遠鏡観測にしろ、開始から成果を収めるまでに長時間を要する学問だ。現在進行形のミッションに並行して、持続的な発展のためには、将来への検討・工夫・挑戦に無駄を懼れずに取り組む活動、つまり若人の夢を育む遊びを続ける必要がある。惑星科学会は、そうした遊び人が集い楽しむ場であれば良い。困難な時代だからこそ、大学にも、社会にも夢を拓く遊び場が欠かせない。

20世紀が夢見た21世紀をわれわれは生きている。大ペリクレスやロレンツォ・イル・マニーフィコの夢が、トゥキディデスやグイチャルディーニの著したカタストロフに至った歴史を繰り返したくはない。現実とは夢と違ったとしても、いや、それだからこそ、また次の時代の夢を追ってわれわれは困難に立ち向かい、破局を回避し、次世代にバトンを渡さねばならない。遊星人とはわれわれのことではなかったのか？

渡邊 誠一郎(名古屋大学)